

琉球大学学術リポジトリ

知識社会におけるキー・コンピテンシーと学校教育

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1412

知識社会におけるキー・コンピテンシーと学校教育

藤原 幸男*

Key Competencies and School Education in Knowledge Society

Yukio FUJIWARA

1. 知識社会とは何か

ポスト資本主義社会において、世界は知識を基盤にした社会、すなわち知識社会に変わってきている。製品を動かし、それを使って社会的に有用な活動を行うには、知識を修得し、使いこなせるようにしなければならない。たとえば、車の整備工にしても、「整備工が読まなければならない修理マニュアルが前世紀には200ページ程度であったものが、今日では約14,000ページもの膨大なものとなっていて、これを読みこなせないと整備工としてうまく仕事をする事ができないという状況になっている」のであり、「このような能力、知識がありとあらゆる分野で要求されるようになっているのである」⁽¹⁾

知識社会においては、知識は急速に陳腐化するので、「高い動機を持って知識を常に新しくしていかなければならない」。そればかりか、知識の質をたえず高めていくことが要求される。それぞれの分野における知識の質を高めていくためには、「知識を取り上げて分析し、比較し、批判し、評価することが必要だし、「仮説を立てたり、発見したり、発明したりすることができる」ことが必要である。⁽²⁾ このことを保障する教育システムを創出し、教育の場でこのようなことを経験した者が社会に出ていき、知識社会の担い手になることが重要な課題となる。

現代の生産活動は物的設備、原材料費、労働コストだけでは成り立たない。知識が中核の資源と

なり、知識を使って何か新しいものを生み出すことに経済的価値の源泉をおいている。経済的価値の源泉は、個々人の知識や能力、アイデアにより多く依存する。

現代の経営者は、企業活動において、製品開発・設計のための創造的な活動、マーケティング手法が必要であり、これらについての専門的知識が生み出す価値を重視しなければならない。企業は協働してこのような専門的知識をたえず創出するとともに、組織全体で共有・改良し、状況の変化に合わせて最適なものに仕上げていかなければならない。このような知識の増大によって、収益を高め、成長することが求められているのである。

現代社会は、ICT（情報通信技術）の発展とグローバル化によって特徴づけられている。ICTの発展とグローバル化によって知識は瞬時に国境を越えて移動する。このことは、知識の共有化を促進するとともに、知識をめぐる世界的規模での競争を生み出す。

ドラッカーは、知識社会としてのネクスト・ソサエティには、①知識の容易な移動により境界のない社会となる、②万人に教育機会が与えられるがゆえに情報移動が自由な社会になる、③万人が知識を手にいれ、しかも万人が勝てるわけではないがゆえに、成功と失敗の並存する社会となる、の3つの特質をあげ、「これら3つの特質のゆえに、ネクスト・ソサエティは、組織にとっても一人の人間にとっても、高度に競争的な社会になる」という。しかも、情報技術による伝達の容易さと

* 琉球大学教育学部教育学教室

スピードが、グローバル・レベルの競争をせまり、競争力はグローバル・レベルにあるべきことを要求する。⁽³⁾

ICT（情報通信技術）の発展は万人を創造の担い手にし、協働による新しい共生社会の創造に寄与する。ケータイやパソコンの驚異的な普及により、誰でも、いつでもどこでも手軽に情報の検索・共有・発信ができるようになった。いまや、だれでも知識創造活動の主体になれるのである。問題意識を共有する主体同士の交流と連携がメール一本で容易になり、このことが協働による新しい共生社会の創造の可能性を生み出している。

「食の安全性を求める関心や認識から出発し、遺伝子組み換え作物に対してその問題性を批判的に理解した草の根運動が、地産地消といった考え方や知識を形成し異なる制度を作り出そうとしている」ように、「多様なアクターが能動的に知識生産という営みをとおして社会をより多元で豊かなものにしていける可能性が『知識社会』には含意されている」⁽⁴⁾といえる。

ところが、よい面だけではない。インターネットなどで他者の開発した知識をすばやく盗み、自分の企業の製品開発に転用して、国際競争に勝とうとする動きが頻繁に起こっている。さらに、人間関係においても、メールは、匿名性を悪用して気に入らない者に対して執拗に誹謗・中傷を繰り返す、攻撃する鋭利な武器ともなっている。新しい対立と憎悪を発生させ強める道具にもなっているのである。

現代社会は知識を基盤とした社会である。他者と関わるケータイやパソコンにしても、それに関する知識の獲得と活用が必要で、それを基軸として諸活動が生成・発展していくのだが、このことは一方では人と人を結びつけ協働を生む可能性があるが、他方で競争を激化し、孤立に追い込む可能性も否定できない。

だとすると、社会の発展を見すえて、知識社会の中でどのような能力をどのような全体構造の中で育てていかなければならないのか、を明らかにしていく必要がある。さらに、それをどのような場でどのように育成するかを、考えていく必要がある。

2. キー・コンピテンシーの概念

OECD（経済開発協力機構）の「コンピテンシーの定義と選択：その理論的・概念的基礎」プロジェクト（DeSeCo）は、1997年末から、現代及び将来の課題解決に必要な広い範囲の能力にとっての理論的・概念的基礎の提供に着手した。DeSeCoは研究の成果を取りまとめて、2001年に最初の報告『キー・コンピテンシーの定義と選択』を刊行し、2003年に最終報告『人生の成功と正常に機能する社会のためのキー・コンピテンシー』を刊行した。⁽⁵⁾以下では、最終報告『人生の成功と正常に機能する社会のためのキー・コンピテンシー』にもとづいて、キー・コンピテンシーの定義と構造について述べることにする。

人が学ぶ力は知識・技能の習得と活用に関わるだけでなく、自分たちの人生や人間関係自体、そして社会自体を変える力を持っているとし、個人の人生にわたる根源的な学習の力として、コンピテンシーということばを用いている。⁽⁶⁾

OECDは知識社会における能力の育成を促進する政策の開発を課題としているが、そのさい、「生産的な経済や民主的なプロセス、社会的な団結や平和の概念を含むものとしてよく教育された市民の潜在的社会的利益を考えながら、人生の成功と良好に機能する社会という観点を通して、コンピテンシーを問うというアプローチをとっている」とし、「個人的なレベルでは、コンピテンシーの潜在的利益は、労働市場や政治のプロセス、社会的なネットワークへの参加の成功を含むものだし、個人の人生にとって意義ある人間関係や一般的な満足を伴う」としている。⁽⁷⁾ここには、政治的・社会的な参加による良好に機能する社会の建設と結びつけながら個人の人生の成功を確立するという、言ってみれば市民としての学習力をどのように育成するかの見点が明確である。

コンピテンシーは、心理社会上の前提条件が流動する中で、固有の文脈に対して、その複雑な要求にうまく対応する能力と定義されている。⁽⁸⁾これは要求志向的アプローチ・機能的アプローチだといえる。

コンピテンシーの内部構造として、知識、認知的スキル、実際のスキル、態度、感情、価値観と倫

理、動機づけが存在し、これらの構成要素が一体となってコンピテンスとして力を発揮する。

コンピテンスにおいて、認知的スキル・知的能力（分析的で批判的な思考スキル、意思決定スキル、一般的な問題解決スキル）および知識基盤が決定的な精神的資源を構成する。

要求に対応し、目標を完遂するには、動機づけ、感情、価値観といった社会的・行動的な構成要素を動員することが必要である。⁽⁹⁾たとえば、市民参加の要求への対応には、民主主義原理の知識、政治的コミュニケーションを説明する技能、公的機関、国家、女性の昇進、政治的権利と関わる姿勢、市民が関わる活動への参加の期待が関わる。ただし、これらがどのように組み合わせられ、動員されるかは、そのときどきの要求の文脈に依存する。こうして、「コンピテンシーは要求との関わりで概念化され、また特定の場面における個人の行為（意志、理由、目標も含む）によって実現されていく」のである。⁽¹⁰⁾

ここで適応というのは消極的なものではなく、むしろ主体的で積極的なものである。要求⁽¹¹⁾の文脈とコンピテンシーは弁証法的相互作用をもち、創造的・変革的でさえある。「人生の異なる領域の中でコンピテンシーが適用されるケースにおいて、適応とは、積極的にある社会的分野において発達した知識、技能、戦略を用いること、新しい分野を分析すること、そして新たな状況の要求に応じて、もとの知識、技能、戦略を翻訳し適応させることを含んでいる」のである。⁽¹²⁾

DeSeCoでは、個人に基礎を置くコンピテンシーに焦点をあてているが、グループやコミュニティが直面する要求への配慮も重視している。そこでは集会的コンピテンシーが重要になるが、それは個人のコンピテンシーとの相互作用の中で形成されていく。この側面は、後で述べるキー・コンピテンシーの3つのカテゴリーの一つ、社会的に異質な集団での相互作用の中に位置づけられている。⁽¹³⁾

DeSeCoでは、重要で大切なコンピテンシーという意味で、キー・コンピテンシーの概念を用いている。キー・コンピテンシーは、個人に基礎を置くコンピテンシーであるとし、1) 全体的な人生の成功と正常に機能する社会という点から、個

人および社会のレベルで高い価値をもつ結果に貢献する、2) 幅広い文脈において、重要で複雑な要求や課題に応えるために有用である、3) すべての個人にとって重要である、という3つの一般的基準を満たすものである、としている。⁽¹⁴⁾

3. キー・コンピテンシーの参照枠の要素としての反省性

DeSeCoは、1999年10月の第1回DeSeCo会議およびその後のワークショップをとおして、キー・コンピテンシーの概念に関する幅広い合意を形成し、キー・コンピテンシーに関する理論にもとづく参照枠を形づくっている。

この参照枠には、2つの主要な要素がある。一つは、精神的複雑さのレベルの具体化であり、二つには、キー・コンピテンシーの3要素によるカテゴリー化である。⁽¹⁵⁾

精神的複雑さについては、反省性という概念を提出している。現代生活の諸領域における挑戦に対応するには、決められた公式を「適用」するのではまったく不十分であり、それを越えるような能力を必要としている。そのためには、「精神的複雑さの自己著述的秩序」（ケーガン）を必要とする。この「秩序」は、個人が「経験から学び、自ら考える」ことを可能にするような批判的スタンスと思慮深さを必要とする。

ケーガンによれば、「精神的複雑さの自己著述的秩序」は、次のようなことを必要とする。

- 社会化の圧力から一定の距離をとり、私たちに向けられた期待や要求についてあらゆる方向から判断することができる。
- 私たちが感情や思考を作り出す主体であるという事実責任をもつこと。
- 明確な抽象あるいは価値観を生み出し、それらに優先順位をつけ、その間の対立を内的に解決する、より複雑な抽象化あるいは価値観の体系を作り出すこと。

これを手がかりとして、DeSeCoは、さまざまな人生の状況において成人が直面する精神的な課題に対応するために必要な能力のレベルとして反省性の意味をとらえるために、次の3つの概念を示している。

——社会空間を乗り切ること

社会領域は、独自の課題や利害、異なった形態の資本、領域内の主体間の闘争によって特徴づけられる。それはゲームに似ており、ゲームにおいてプレイヤーであるためには、「問題になっている領域に特有の知識、価値観、ルール、儀礼、コード、概念、言葉、法律、機関、および対象物」に慣れ親しむ必要がある。何よりも、過去の経験においてすでに出会ったパターンを認識したり、以前に経験した状況と新たに経験する状況の類似性を認識したり、世界における活動を導くためにパターンを活用することが重要である。

——差異や矛盾に対処すること：「あれかこれか」を越えて

多様な世界は、明らかに矛盾し、相容れない目標を同じ現実の諸側面として統合することによってうまく解決することを要求している。多元的であれば対立する側面に、うまく思慮深いやり方で対処することが求められており、解決策や解決方法が1つではないことを認識することが必要である。矛盾していたり、あるいは互いに相容れない考え方、論理、立場の間に存在する多くのつながりや相互関係を考慮に入れつつ、より統合的なやり方で考え行動することを学ばなければならない。

——責任をとること

個人は単に適合的なのではなく、革新的で、創造的で、自己主導的で、内発的な動機づけをもち、さまざまな社会領域において自らの決定や行動に責任が持てることを期待されている。このことは、自己中心的、個人主義的な行動の概念化とは関係がなく、社会的コミュニティにおける理解可能な認識に依存している。

社会的目標、教え・伝えられてきたこと、人生全体の視点から、どのような振る舞いが正しいのか、あるいはまちがっているのか、にてらして、自らの行動を振り返り、評価することが求められている。

3つの概念における精神的複雑さの高次レベルは、批判的思考や思慮深い実践の全体的な発達を必要とする。そのためには、個人が「社会化のプロセス」から距離をおき、自律した判断ができ、自らの行動に責任をとれるようになるまで、十分

に社会化される必要がある。

以上見たように、「反省性は、キー能力の内部構造に関わっており、要求と行動に立脚したキー・コンピテンシーの概念化に関連する重要な横断的特徴である」。

4. キー・コンピテンシーの3カテゴリー

DeSeCoは、領域を越えて共通するキー・コンピテンシーを、3つにカテゴリー化した。3つのカテゴリーとは、「社会的に異質な集団で交流すること」、「自律的に活動すること」、「道具を相互作用的に用いること」である。「社会的に異質な集団で交流すること」は他者との個人の交流、「自律的に活動すること」は相対的な自律性とアイデンティティ、「道具を相互作用的に用いること」は道具を通しての世界との相互作用に特有の強調点がある。

DeSeCoでは、この3つのカテゴリーは、現代生活において有能な行動をとるための条件としての高次の精神的複雑さの発達を含意している、という。自律的に活動するためには、社会領域を乗り切るために必要な精神的なプロセスが必要だし、多様性への対処や責任の遂行が必要になる。このことは他の2カテゴリーにも共通する。また、逆に、3カテゴリーは、個人が関連するすべての社会領域において能動的で責任ある役割を果たすようにエンパワーする能力を構築する基盤を構成するのである。⁽¹⁶⁾

とかくするとカテゴリーの内容のみに注目されるが、高次の精神的複雑さの発達との関連で3カテゴリーをとらえていることに注意する必要がある。

(1) 社会的に異質な集団で交流する

人間は自己概念、アイデンティティ、社会的な意味を、他者とのつながりに依存している。アイデンティティは、環境との関係、他者との対話・交流によって発達する。私たちは緊密な関係のネットワークの中で生活し、協力し、競争し、分かち合っている。グローバル化の広がりが示すように、社会的に異質な集団の中で交流することは、同じ言語、記憶、歴史、文化、社会経済的背景を共有していない人々との社会的結びつきや共存の発展

に関わる。

このカテゴリーには、①他者とうまく関わること、②協力すること、③紛争を処理し解決することの3つが下位区分されるが、いずれも他者と思慮深く責任を持って交流することに関わる。⁽¹⁷⁾

①他者とうまく関わる能力

この能力は、他者との人間関係の開始、維持、発展を可能にする。他者の価値観、信念、文化、歴史を尊重し、大切にすることが、前提となる。さらには、共感することが前提となる。共感はその人の視点に立って状況を想像し、その人の感じることをわがことのように感じることである。この共感、自分にとって当たり前と感じていたことが他者にとってはそうではなく、自分にとっての当たり前が共有されていないことに気づかされることになる。このときに、自らの違和感情や内面の気分をうまく対処することが重要になる。

②協力する能力

現代生活の多くの要求や目標は、同じ利害、目的、あるいは確信を共有する人々が、職場、市民組織などの集団として力を合わせることを必要としている。このキー・コンピテンシーは、共通の目標に向かって他者と協力し、一緒に仕事をする能力である。

DeSeCoでは、ここでの焦点は、集団全体として必要とされる能力ではなく、集団の個々の成員が必要とする能力であるとしている。そこから、この能力の重要な要素には、まず、自らの考えを提示し、他者の考えに耳を傾けること、枠組みを切り替えて異なる視点から問題に接近すること、他者の役割・責任および全体目標との関係で自分の役割や責任を理解すること、自らの自由を制限してより大きな集団に調和すること、議論の力学を理解すること、連帯の限界を探知し戦術的・持続可能な提携を構築すること、対立する利害の間で妥協を図ることなどが中心に位置づくとしている。最後に、この能力は交渉し合意を築くこと、異なった色合いの意見を許容する決定を行うことをともなっている、という。

③対立を処理し解決する能力

この能力は、対立を処理し、解決し、対立する利害を調整し、許容しうる解決策をみつけだす能力である。対立は生活のあらゆる側面で生じる。

その意味で、対立は社会的現実の一部であり、人間関係に内在し、自由と多元主義の見返りとして存在する。対立に前向きに接近するカギは、それを全面的に避けたり、排除しようとしたりせず、それを対処すべきプロセスととらえ、賢明で、公正で、効率的なやり方で対処することである。

この能力は、他者のニーズや利害を考慮し、ある問題の当事者が他者を犠牲にしてそのすべての目標を達成しようとするのではなく、すべての当事者がある程度利益を得ることが望ましいと考えることを前提としている。対立の原因、およびすべての立場から理由づけを分析し、異なった立場を取りうることを認識することである。そこから問題を構成し直すこと、ニーズと目標に優先順位をつけること（この状況で何をあきらめることができるか）が対立の処理と解決に必要である。

(2) 自律的に活動する

自律的に活動するとは、関係している他者の期待によって自らを方向づけるのではなく、自分の基準を用いて自らを方向づけて関係の条件を作り出すことである。自律的に活動することは、2つの相互に関連し合った重要な考え方を組み込んでいる。1つは、自らを定義づけ、個人的アイデンティティを発展させることであり、もう1つは、与えられた文脈において決定したり、選択したり、能動的で思慮深く責任ある役割を果たしたりするという意味で相対的な自律性を行使することである。相対的な自律性とは、それぞれの組織や場の限界の範囲内でできうるかぎり個人を自律的にするということである。⁽¹⁸⁾

知識社会における活動はしばしば組織活動をとらなう。それをふまえて、ここでは自律的に活動するとは、独立して1人で活動するのではないことを明確にしていることに注目したい。その上で、組織との関わりで、「組織や場の限界の範囲内で」自律的に選択・決定し、個人の責任を果たすことを問題にしているのである。

このカテゴリーにおいて、責任と思慮深さをもって自律的に活動することは、次の3つの下位のコンピテンシーから構成される。⁽¹⁹⁾

①大きな展望・文脈の中で活動する

この能力は、問題になっている事柄をグローバルなレベルで理解し、自らの役割と行動の結果を

より広い文脈（歴史的、文化的、環境的）で理解できることである。このことは、個人が公正で責任あるやり方で行動するのを確実にするのを助ける。

②人生計画と個人的なプロジェクトを設計し実行する

私たちが義務、目標、夢（達成しなければならないこと、達成すべきこと、達成したいこと）をもっているとすると、それを達成するためのアイデアや計画を作成しなければならない。そのさい、その計画が自分の人生において意味を持ち、またより大きな人生計画と一致するようにする必要がある。

人生計画と個人的なプロジェクトを設計するには、未来志向であること、すなわち楽観主義と潜在的可能性を前提とする。同時に、アクセスできる資源・必要な資源を見つけ出し、評価すること、そしてプロジェクトを実現するための適切な手段を選択することが必要である。さらに、目標に優先順位をつけ、その意味を明確にしたり、効率的、効果的なやり方で自らの資源を使ったりすることを必要とする。このことは、自己管理能力、自ら学習し仕事をする能力という用語で表現されることが多い。

③自らの権利、利益、限界、ニーズを守り、主張する

選択肢をもち、ニーズに応え、責任を取るためには、自らの利益、権利、限界、ニーズをつねに守らなければならない。自らの権利を擁護し、主張することは、自律した活動の根底に位置づく。必要があれば調査を通じて、自らの権利、ニーズ、利益を明らかにし、評価すること、またそれらを能動的に主張したり、擁護したりすることは、個人に任されている。この能力の発達により、個人は権利を主張し、尊厳ある存在を保証され、自らの人生に対してより大きなコントロールができるようにエンパワーされる。

(3) 道具を相互作用的に活用する

グローバル経済と現代社会の社会的・専門的要求は、コンピュータなどのものとしてのツールだけでなく、言語、情報、知識のような社会文化的な道具の活用に対する熟練を必要としている。

ここでは、「相互作用の」ということが重要に

なる。私たちは道具を通じて世界と出会う。この出会いが世界を意味づけ、世界の相互作用における有能さを作り出し、変化への対処や新たな長期的課題にどのように対応するかを明確にする。そこで、道具の相互作用的活用能力とは、道具の活用を通じて確立される新しい形の相互作用を認識し、日常生活における自己の行為・行動をそれに適合させる能力を意味している。⁽²⁰⁾

このカテゴリーには、次の3つの能力が関連している。①言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する、②知識や情報を相互作用的に活用する、③技術を相互作用的に活用する、の3つである。

①言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する

この能力は、言語スキル（話しことばと書きことば）や、計算その他の数学的スキル（たとえばグラフ、表、さまざまな形のシンボル）をさまざまな状況（家族、職場、市民生活）において効果的に活用することに焦点があてられる。これは、社会や職場でうまく機能し、個人的・社会的な対話に効果的に参加するために不可欠な道具である。この能力は「リテラシー」という用語で呼ばれることがある。

このキー能力の例としては、PISAで定義された読解リテラシーと数学的リテラシーの枠組みがあげられる。読解リテラシーは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力である」と定義されている。数学的リテラシーは、「数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在および将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心をもった思慮深い市民としての生活において確実な根拠に基づき判断を行い、数学に携わる能力」と定義されている。⁽²¹⁾

読解リテラシーでは、社会参加を目標としてあげており、社会的、文化的、政治的関与を重視している。読解には相互作用的な性質があり、テキストに連動して自分の考えや経験を呼び起こし、自分の考えや経験と結びつけて熟考することが求められている。

数学的リテラシーでは、思慮深い市民としての

生活を問題にし、その視点から生活において確実な根拠に基づいて判断することの重要性を訴え、それを能力として形成することを求めている。

②知識や情報を相互作用的に活用する

人生のあらゆる分野でうまくやっていくためには、個人は知識や情報にアクセスするだけでなく、それらを効果的に思慮深く責任を持って活用する必要がある。この能力は、たとえば、製品やサービスの選択や、選挙や住民投票における選択を調査したり、評価するような状況において不可欠である。

このキー能力の具体例は科学的リテラシーである。PISAにおいては、科学的リテラシーは「自然界および人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」と定義づけられている。⁽²²⁾

このキー能力は、知識や情報の社会的、文化的、思想的文脈と影響を批判的に考察することが必要である。情報源とともに情報の質、適切さ、価値を批判的に評価する必要がある。この情報能力は、意見を形成し、意思決定を行い、賢明で責任ある行動をとるための土台として必要である。⁽²³⁾

③技術を相互作用的に活用する

この能力は情報、コミュニケーション、およびコンピュータ技術に関係している。DeSeCoにおいて定義された技術能力は技術の習熟以上のものを含んでいる。技術に適應する能力は技術能力の重要な側面であるが、その全面的な力が実現されるのは、技術によって可能になる新しい形の行動や相互作用への認識が得られ、日常生活においてその可能性を活用する能力がある場合である。インターネットやメールを使うには、それほどの技術的スキルは必要とされないが、その技術が人々の働き方、情報へのアクセスの仕方、他者との関わり方を変容させる可能性を持っている。このような変容について考えたときにはじめて、それらの真の可能性が現実化される。技術の目的や機能を全般的に理解しその可能性を構想する能力を形成することが、技術の習熟以上に重要である。⁽²⁴⁾

5. 学校におけるキー・コンピテンシーの育成

これまでキー・コンピテンシーの概念と構造をみてきた。キー・コンピテンシーは現代および将来の課題解決に必要な広い範囲のコンピテンシーを示している。反省性（省みて考える力）を中核にして、自律的な行為、異質な集団との交流、対話への道具活用という3カテゴリーを実践する。しかも、「人生の成功」と「正常に機能する社会」という個人と社会の両方をみすえて、相互関連を生み出すことをめざしている。

学校はキー・コンピテンシーの育成に大きな影響を与える。学校はキー・コンピテンシーが育つような環境を用意しなければならない。教師の指導と援助のもとで自主的な活動を生成・発展させ、協働の中で総体として反省性の発達と3カテゴリーの能力が育つように、豊かで充実した活動を保障しなければならない。

今日の日本の学校の状況をふまえれば、学校におけるキー・コンピテンシーの育成は次のことを課題としているといえる。

まず第1に、学級の生活上必要な課題を解決したり、学級の生活を発展させるような取り組みを展開したりすることである。我が国ではこのような取り組みを学級づくりという視点から自治的に展開してきた伝統がある。その伝統を生かしながら、子どもたちで、「①他人といい関係をつくる、②協力する・チームで活動する、③争いを処理し、解決する」ことを体験的に学んでいくことが重要である。この活動が質的に発展していく中で、自律的に活動する能力（①大きな展望の中で活動する、②人生計画や個人的プロジェクトを設計士実行する、③自らの権利、利害、限界やニーズを表明する）が育ってくる。

第2に、学級の文化的・社会的活動および「総合学習」・「教科学習」において、ローカルな素材からグローバルな課題の追求に発展していくような題材を取り上げて、個人的および協働的に追求する活動を組織的に展開することである。このような活動に付随して、重要なキー・コンピテンシーが育つのである。

第3に、学級の文化的・社会的活動および「総

合学習」・「教科学習」において、言語、シンボル、テキストを相互作用的に用い、知識や情報および技術を相互作用的に用いることによって世界と出会い、他者と出会い、意味世界を広げ、編み直すことである。このような文脈の中に読解リテラシー・数学的リテラシー・科学的リテラシーを位置づけることが重要である。これらのリテラシーをツールとして、世界と出会い、他者と出会い、意味世界を広げ、編み直すことを経験させなければならない。

第4に、キー・コンピテンスは、主要には、臨床的關係において活動あるいは学習の状況を共有している教師や子どもの自己評価と相互評価をとおして育成度が明らかになるということ、子どもと教師の間で認識しておくことである。そしてこの認識を学校全体に広げ共有することである。

PISAなどの国際学力調査は、国際標準としてのコンピテンスの中の一部として限定的な性質を持つリテラシーの学校での育成の不充分さを具体的に認識させてくれるとともに、反面で、国際比較は国内におけるテスト主義の発生と波及という形で教育を変質させ、学校においてコンピテンシーをゆたかに育成する環境を破壊することになりかねないという問題点をきちんと認識することが重要になる。⁽²⁵⁾

注

- (1) 国立教育政策研究所編『日本の教育が見える——教育インディケータ事業 (INES) と生徒の学習到達度調査 (PISA) 2000年調査結果から掘り下げる日本の教育の現状——』2004年、7ページ。
- (2) 同上、6～7ページ。
- (3) P・F・ドラッガー (上田淳生訳)『ネクスト・ソサエティ』ダイヤモンド社、2002年、5～6ページ。岡田章宏は、我が国の労働環境を見ると、ドラッガーの予見が現実の中で具現化していると、「自発的協力」原理による「協力社会」の実現を追求する論者よりも、ドラッガーの描くイメージのほうが説得的であるように思われる、と述べている。そして、知識に関わって、「『自発的協力』原理に基づいて練り上げら

れた『知識』であっても、それを人間の創造的行為の所産として永続的に共有し続ける手立てを講じない限り、『知識』に込められた人間性それ自体が消費しつくされる恒常的事態は避けられない」と指摘している。(岡田章宏「我が国における新自由主義的構造改革批判の一断面」、『ポリテイク』第12号、225～228ページ。

- (4) 後藤彰「知識の包括的概念モデル——知識社会の中で知識生産することの含意——」、『大学院研究年報・総合政策研究科篇』第6号、中央大学、2002年、225～226ページ。
- (5) 最初の報告のもとになった第4回OECD/INES (教育インディケータ事業) 総会の会議文書における報告 (ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク「主要能力の定義と選択」) は、渡辺良 (研究代表者)『OECD教育インディケータ事業の動向と評価に関する研究、中間報告 (2)』に日本語訳が収録されている。最終報告は、ドミンク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編 (立田慶裕監訳)『キー・コンピテンシー』明石書店、2006年として公刊されている。
- (6) ドミンク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編 (立田慶裕監訳)『キー・コンピテンシー』明石書店、2006年、7～9ページ。同書では、コンピテンシーと並んでコンピテンスの用語が使われているが、両者は同じ意味であると見てよい。
- (7) 同上、27ページ。
- (8) 同上、65ページ。
- (9) 同上、67ページ。
- (10) 同上、69ページ。
- (11) 日本語訳 (『キー・コンピテンシー』明石書店、2006年) では需要ということばがあげられている。需要は経済学用語で、需要—供給という文脈の中で使われ、教育用語としてはなじまない。ここでは、要求ということばに直している。
- (12) 同上、70ページ。
- (13) 同上、72～73ページ。
- (14) 同上、88～90ページ。
- (15) 同上、95ページ。以下の反省性の記述については、95～103ページにもとづく。

- (16) 同上、104～105ページ。
- (17) 同上、106～109ページ。
- (18) 同上、110～111ページ。
- (19) 同上、111～116ページ。
- (20) 同上、116～117ページ。
- (21) 国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能②——OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 2003年調査国際結果報告書——』ぎょうせい、2004年、13～17ページ。
- (22) 同上、17～18ページ。
- (23) 同上、119ページ。
- (24) 同上、119～121ページ。
- (25) 岩川直樹「顔を奪うシステム——全国一斉学力テストの忌まわしき作用——」、『世界』2007年5月号を参照。岩川は、「教師と子どもの臨床的關係において、テスト結果は、それぞれの子どもの学びの意味や価値を読み解く多角的で繊細なとなみのなかに、あくまでもその素材のひとつとして組み込まれているにすぎない」が、全国一斉学力テストは「教師と子どもの臨床的關係において生起する複雑さやゆたかさのすべてを捨象した『データ』をつくりだす」ばかりか、『教育の成果』を比較可能にみせる唯一の指標としての特権的な地位を獲得する。その結果、「学力テストは、教育実践の内側でその手段のひとつとして機能するものから、教育実践の外側でそれを支配するためのものに転化する」と述べている。このことに注意する必要がある。